

テレビ番組のインタビュー・トークにおける発話デザインの相互行為的分析

陳, カ

<https://hdl.handle.net/2324/1959191>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (学術), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 陳 力

論 文 名 : テレビ番組のインタビュー・トークにおける発話デザインの相互行為的分析

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、会話分析の観点から、テレビ番組のインタビューの参加者が直面する相互行為上の具体的な課題を達成するために、「文法」が資源としてどのように使われているのかを明らかにした上で、「文法」がテレビ番組のインタビューという制度とどう関わっているのかを考察する実証的研究である。具体的には、インタビュアー (interviewer, 以後 IR) の特徴的な発話デザインに注目して分析を行った。本論文は、以下の全 7 章から構成される。

第 1 章では、本研究の出発点、研究背景及び研究課題を述べた。まず本研究の出発点として、私たちは異なった場面において異なった話し方をするという実例を提示した上で、テレビ番組のインタビューという制度的場面における IR の話し方は特徴的であり、それがインタビューらしさを作りあげているという点を述べた。次に、本研究の研究背景としてのメディアと言葉の研究、制度的場面の会話分析という領域について紹介し、それに対する本研究の位置付けを示した。最後に、本研究の目的を達成するための具体的な研究課題について述べた。

第 2 章は、会話分析という研究分野の概説である。まず会話分析の起源、発展及び会話分析の基本的な考え方について説明した。次に、会話分析の視点から捉えた「文法と相互行為」、「文法と制度」の関係について述べた。最後に、本研究に関わる会話分析の知見、データの概要、及び書き起こしの記法について説明した。

第 3 章から第 6 章が本研究の具体的な研究課題についての分析と考察である。第 3 章では、語用論的に完結したものの統語的に完結していないという特徴を持つ質問デザインのバリエーション(「て形」と「連体/終止形止め」)について分析した。その結果、(1) 「て形」と「連体/終止形止め」は、IR がインタビューされる側 (interviewee, 以後 IE) に属する知識領域に踏み入るとき、IE への配慮と丁寧さを示しながら質問をデザインするために用いられていることがわかった。(2) 「て形」と「連体/終止形止め」による質問の直後の位置は、IE にとっても話者交替の可能性がある「移行適切場」(transition relevance place) の位置として認識され、応答を返す機会として認識されていることがわかった。(3) 「て形」と「連体/終止形止め」の質問デザインを利用する要因には、インタビューという制度の影響があることも示した。

第 4 章では、統語的に完結していない質問デザインのバリエーションのもう 1 つの種類である「と文末」について分析した。「と文末」は、IR が IE の発話に対して理解確認を求めるとき、相手の発話を正しく理解したというスタンスを示すための資源として用いられているものである。「と文末」の相互行為上の働きを明らかにするため、「～ということ (意味/わけ) ですか」(「ということですか」類) による理解確認の発話と比較しながら分析した。その結果、(1) 「と文末」は、直前の発話内容を言い換えたり要点をまとめたりして、それについての確認を求めるときに用いられ、確信の高さ及び話し手が正しく理解したという態度を示していることがわかった。(2) 「と文末」によ

る理解確認は、形態・統語的及び韻律的に一種の平叙文質問として作用し、相手からの同意を前提としてデザインされた発話であることが確認された。(3) 「と文末」を用いて理解確認を行うことにより、視聴者に情報をわかりやすく伝えると同時に、会話の進行を妨げる度合いを最低限に抑えることができるということを示した。

第5章では、参加者の「認識的スタンス」の観点から、発話末に使われる「のではないか」による発話デザインのバリエーション（上昇調と下降調）について分析した。この言語形式は、IRがIEに情報を要求するような質問を行うための資源として使われる場合もあれば、逆に、IRが主張を行う、すなわち質問でない行為を行うための資源として利用される場合もある。分析の結果、(1) 上昇調の「のではないか」は、IRの「見込み」（想定や推測）についてIEに確認を求めるために用いられ、IRの認識的不確実性を示している。同時に、「見込み」という形でIEの知識を示すことにより、進行中のIEの活動の展開を支え、IEから多くの関連情報を引き出すことができることがわかった。(2) 下降調の「のではないか」は、直前の発話に埋め込まれた主張に反対したり、挑発したりする行為（「意見提示」「からかい」）を行うために用いられ、IEの知識状態への疑いを示しているとともに、直前のIEの発話における「語る価値」のあるものを際立たせる手段としても利用されるということも明らかになった。

第6章では、IEの「発話途中」（文法、韻律、行為のいずれかから見て完結していない位置）におけるIRの発話デザインについて分析した。その結果、このようなIRの発話は、IEの応答産出・インタビューの進行を促進させ、IEの発話への理解を積極的に示すためにデザインされていることが分かった。ただし、IRの予測によって産出された発話は必ずしもIRが言おうとしていた続きであるとは限らないため、実際にはインタビューの促進を妨げることもあることが示された。また、IRの発話は、それに対するIEの反応によって連鎖上の意味が異なってくることがわかった。いずれにしても、そのようなIRの発話は、IRがIRらしくインタビューをコントロールしつつ、積極的な聞き手として振る舞うことを志向している発話であることがわかった。

第7章では、本研究全体の議論をまとめ、その意義と今後の展望について述べた。まず本研究の意義としては、話し言葉の研究、言葉とメディアの研究、制度的場面の会話分析に対して、以下の点で学術的貢献をもたらすと言える。(1) 従来の言語学では注目されない、あるいは従来の文法観でうまく説明できない話し言葉に特有の言語現象を捉えて分析を試みた点である。(2) メディアと言葉の研究として、メディア・トークの一種であるテレビ番組のインタビュー・トークを取り上げ、メディアの中の言語使用に焦点を当てて分析・考察した点である。(3) IRによる発話デザインがテレビ番組のインタビューという制度とどのように関わっているかについて考察し、会話分析の観点から見た文法と制度的相互行為の関係を明らかにしたことによって、制度的場面の会話分析という分野にも貢献できた点である。今後の課題として次の四点が挙げられる。(1) 本研究は特定の言語形式がテレビ番組のインタビューの中でどのように用いられているのかについて分析したが、これらの言語形式が日常会話で使われる際、両者の間にどのような違いがあるのかという説明は十分に行えなかったため、両者の比較は今後の課題である。(2) 本研究では、IRの発話デザインを分析する際、主に言語的資源に焦点を当てて分析を行った。非言語的資源が同時に用いられている点にもわずかながら言及した。今後は非言語的資源への分析を増やす必要があると考える。(3) 本研究はIRの発話デザインを通じてどのような行為が行われたのかという視点で分析を行ったが、反対に、同じ行為を行うためにはどのような発話デザインを用いることが可能であるか、という行為の視点からの分析は行えなかったため、今後の課題としたい。(4) 本研究では、データの量や多様性が不十分であり、メディアの中での文法、メディアの中の参加者の実践の一端を示しているに過ぎない。今後はより多くのデータを収集し、さらに詳しい分析を行う必要があると考える。